辞書にみる「父」と「母」の諸相

丸　山　和香子

ーはじめにー

活字離れがいわれて久しいが、辞書や辞典は毎年数多く出版されている。ユニークな趣向をとり入れたり、細かい希望にそうように、その辞書を使う対象を限定したものもある。大きな活字を使った中年以上の人を対象とした辞書はその１例である。（注１）。年々求められる情報の内容は変化するし、情報量は増大することは必至である。しかし、エレクトロニクスの各分野での応用を考えると、これが、ことばの分野にも導入され、従来の辞書に加えて、将来はより細かい必要に応じて正しい情報の提供が可能になるであろう。この情報の授受は、ことば或は記号によることが多く、中でも文化の継承は、ことばによっている領域が広いと思われるので、ことばの共通の認識は不可欠である。この共通の認識を育てるのに教育が大きな役割を果たしている。そして、教育過程にある小・中・高校生あたりを対象とした辞書の役割は、大きいといえよう。

それでは、彼らはどんな場合に辞書をひくのだろうか。身近にいる生徒学生の様子からみると、

(1)　よめない漢字のよみを知りたい時。

(1)'　不安なよみを確かめる時。

(2)　語句の意味を知りたい時。

(3)　新たに知った語句を使う時。などであろうか。(1)の場合は当然、漢和辞典のたぐいにまかせられるであろうが、これがまた使いにくいという声が高い。（注２）。学校の図書室や、各教室にそなえてある辞書の中でも漢和辞典は、いつまでも新らしくきれいである。漢和辞典を使わない場合、自然に身についた知識から類推し、国語辞典をひき、試行錯誤をくりかえして、正しいよみに到達することも多い。国語辞典を使えば、よみと同時に、(2)の目的も叶えられる。しかし、語句の意味を知っただけでは不十分である。それを適宜に使うことができなければ、言語活動を豊かにすることはできない。それでは、これらの要求に辞書は応えているであろうか。今回は、父母をあらわす語とその語釈を、５種の辞書を用い、比較・検討してみた。この５種の辞書とは、前年度、共同研究（注３）に用いた次のものである。（注４）。

岩波国語辞典　（１９７９.１２）（岩波と略記）
角川新国語辞典（１９８１.　１）（角川と略記）
新明解国語辞典（１９８１.　２）（明解と略記）
新選国語辞典　（１９８１.　１）（新選と略記）
学研国語辞典　（１９８１.　２）（学研と略記）

父と母をあらわす語という身近かなことばに焦点をあわせた理由は、大きく２つある。

1つは、このことばで表現される人物が、いろいろな立場に立つ為に、同一人物でありながら、その表現はさまざまであり、それを辞書がどのように扱っているかを知ることである。いいかえれば、父母をあらわす他の語が、辞書にどのように採られているかといいうことと、採録した語をどのように説明しているかをくらべ知ることである。第2の理由は、語を知って、次にそれを自分で使う場合、場面にあった適切な使い方ができるような説明がつけられているかどうかを知ることである。第2の点は、同一人物を1つのことばであらわしながら、そのことばが、いくつかの場面で用いられることを、辞書はどのように説明しているかをみることでもある。

（一）　父・母をあらわす語の採録状況

父・母をあらわす語の採録状況をみると、<表―1><表―2><表―3>のようである。この表にあげた語は、5種の辞書のうち1種にでも見出し語として採録されているものから、5種すべてに採録されたものである。父・母をあらわす語を、男女の対応という面からみると、対応する語が採られているものと、対応するものがないものがある。

前者には、次のものがある。父・母；父・母（フ・ボ）；父親・母親；実父・実母；家父・家母；継父・継母；継父（ママチチ）・継母（ママハハ）；義父・義母；養父・養母；老父・老母；亡父・亡母；慈父・慈母；愚父・愚母；父上・母上；おもうさま・おたあさま；おとうさん・おかあさん；とうさん・かあさん；パパ・ママ；おやじ・おふくろ；尊父・尊母；ちちご・ははご；父君（チチギミ）・母君（ハハギミ）；異父・異母；父方・母方；などである。

対応するものがないものは次のようである。まず、父側に属するものをあげる。

親父、男親、家君、先考、先人、先君、先父、厳父、厳君、君父、とと、てて、てておや、ちゃん、父君（フクン）、御親父、乃父（ダイフ）、岳父、雷親父、たぬきおやじ、など20語である。

母側に属するものは、次のものである。

生母、うみの母、先妣（センピ）、賢母、悲母、母者人、おっかあ、おかか、聖母、マリア、サンタマリア、アベマリア、マドンナ、孟母、ムッター、瞼の母、同母、嫡母、教育ママなど19語である。このうち、聖母から孟母までの6語は、固有名詞の性格をもち、他の13語とは異なる。

父側の「親父（シンプ）」・「御親父（ゴシンプ）」は、5種のうち（学研）をのぞく4種の辞書が採録しており、この語の存在の確かさを示しているが、それに対応する母側の語はない。父側の「男親」は、（角川）のみとりあげており、これに対応する語は女親であることは明らかであるが、どの辞書にもない。（角川）が貴重なスペースをこの一項目にさいた理由を知りたい。「家君」「君父」は、現代の言語生活からは遠いものではあっても、各方面にわたる学習段階にあるものにとっては、必要な語であろう。この類に属する母側の語は「先妣（センピ）」1語であり、5種のうち（新選）に採録されているのみである。「厳父」

「厳君」という男性側の性情をあらわすことばのついた語に対応する母側の語は、「賢母」であろうか。両性の特徴が表われている。「とと」「てて」「てておや」「ちゃん」といった父側の語に対するものとして「おっかあ」「おかか」をあげうるが、母側の語は少ない。父側では「雷おやじ」「たぬきおやじ」といった揶揄的語があるのに対し、母側は「瞼の母」となり、また、「生母」「うみの母」「嫡母」といった、生物的つながりをあらわす語が採録されている点など、対応する語のないことばに、父側・母側の特性をみることができる。しかし、対応する語が存在しながらも、辞書に採録されなかったものもあるであろうし、その際に働いた編集者の取捨選択にも大きな問題がある。（注５）。

＜表－１＞

○印　採録されている
×印　採録されていない
▲印　用例とか例語である

語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研	語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研
父チチ	○	○	○	○	○	母ハハ	○	○	○	○	○
父フ	○	×	○	×	○	母ボ	○	×	○	×	○
父　親	×	○	○	○	×	母　親	×	○	○	○	×
親シン父プ	○	○	○	○	×						
男　親	×	○	×	×	×						
						生　母	○	○	○	○	×
						うみの母	×	○	×	×	×
実　父	○	○	○	○	○	実　母	○	○	○	○	○
家　父	○	○	○	○	○	家　母	○	×	×	×	○
家　君	○	○	×	○	×						
継ケイ父フ	○	○	○	○	×	継ケイ母ボ	○	○	○	×	○
継ママ父チチ	○	○	○	○	×	継ママ母ハハ	○	○	○	○	○
義　父	○	○	○	○	○	義　母	○	○	○	○	○
養　父	○	○	○	○	○	養　母	○	○	○	○	○
老　父	×	○	○	○	○	老　母	○	○	○	○	○
亡　父	×	○	○	○	○	亡　母	×	○	○	○	×
先　考	○	○	○	○	×	先セン妣ピ	×	×	×	○	×
先　人	○	○	○	○	○						
先　君	○	○	○	×	×						
先　父	×	○	×	×	×						

＜表－２＞

語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研	語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研
慈　父	○	○	○	○	○	慈　母	○	○	○	○	○
愚　父	○	×	×	×	×	愚　母	○	×	×	×	×
厳　父	○	○	○	○	○	賢　母	○	○	○	○	×
						悲　母	×	○	×	○	×
厳　君	○	○	○	○	○						
君　父	○	○	○	○	×						
						母者人	○	○	○	×	×
父　上	×	○	○	○	×	母　上	○	○	○	○	×
おもうさま	×	×	○	×	×	おたあさま	×	○	○	○	×
おとうさん	○	○	○	○	○	おかあさん	○	○	○	○	○
とうさん	×	○	○	×	×	かあさん	×	○	○	×	×
とと	○	○	○	○	×	おっかあ	×	×	○	×	×
てて	○	○	○	○	×	おかか	○	×	○	×	×
てておや	×	○	×	○	×						
ちゃん	○	○	○	○	×						
パ　パ	○	○	○	○	○	マ　マ	○	○	○	○	○
おやじ	○	○	○	○	×	おふくろ	○	○	○	○	○
尊　父	○	○	○	○	○	尊　母	×	○	×	×	×
ちちご	×	○	○	○	×	ははご	○	○	○	○	×
父フ君（クンギミ）	○	○	○	○	○	母　堂	○	○	○	○	○
父チチ君	×	○	○	○	○	母　君	○	○	○	○	×
御親父	○	○	○	○	×						
乃父（ダイフ）	○	○	×	○	×						
岳　父	○	○	○	○	×						
雷親父	○	○	○	○	×						
たぬきおやじ	×	○	×	○	×						

<表－3>

語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研	語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研
						聖　母	○	○	○	○	○
						マリア	×	○	○	○	○
						サンタマリア	○	○	○	○	×
						アベマリア	○	○	○	○	×
						マドンナ	○	○	○	○	○
						孟　母	▲	○	○	×	×
						ムッター	×	×	○	○	×
						瞼の母	×	○	×	○	○
異　父	○	○	○	○	×	異　母	○	○	○	○	○
						同　母	○	○	○	○	×
						嫡　母	○	×	×	×	×
父　方	○	○	○	○	○	母　方	○	○	○	○	○
						教育ママ	×	×	×	○	×
父　系	○	○	○	○	×	母　系	○	○	○	○	○

<▲～三遷の教えとある>

（二）　辞書の語釈の比較

まず、父と母は対応する語であり、5種の辞書にもれなく採録されている。その語釈は次のようである。（注6）。

『父』（岩波）親である男。比ゆ的に新しいものの開祖、先駆となった偉大な人。「現代統計学の――」、▲配偶者の父を言うこともある。

『父』（角川）①男親、子供のある男＝てて㊙母。②あるものを創始した人。偉大な業績を残した人。「近代医学の――」

『父』（明解）①その人の男親。〔新たに物事を始めた偉大な先駆者の意にも用いられる〕例「進化論の父、ダーウィン」②〔キリスト教で〕天帝。

『父』（新選）①おとこ親←→母、
用法；他人の父親を尊敬していう場合には「（お）父上。（ご）父君。ご尊父。厳父。厳君。父御」などを使う。自分の父を他人にいう場合は、「老父。家父。

乃父」。妻の父は「岳父」。故人となった父は、「亡父。先考。先代」などという。②キリスト教で人格をそなえた唯一の神。③守りそだてた人。

『父』（学研）おとこ親。おとうさん。　対 母。

『母』（岩波）親である女。比ゆ的に物事を産み出すもと。「必要は発明の　　」。
▲配偶者の母を言うこともある。

『母』（角川）①女親。こどもをもつ女。㊀父。②物事をうみ出すもと。「－　なる大地」

『母』（明解）その人の女親。〔物事を生み出す・基（原動力）の意にも用いられる。〕
例「必要は発明の――」「――なる大地」（＝母の役目をする）・一后。一宮」
⟷父。〔中世かなり長期にわたり「はわ」とも言った。〕

『母』（新選）①親である女・めす。子のある女・めす。女親。母親⟷父
用法：他人の母をいう場合は「（お）母上、母君、（ご）母堂」などといい、自分の母を他人にいう場合は「老母・母」という。②物事のできるもと。「必要は発明の――」

『母』（学研）①おかあさん　対 父。②物事をつくり出すもと。「必要は発明の――」。

父・母の語釈を較べてみると、大同小異ではあるが、（明解）の表現に「その人の男（女）親」といった他の辞書にはないことばを用いている。同じく（明解）で、キリスト教で使われる「父」の説明を加えていること、歴史的視野から「母」に説明を加えていることなどユニークである。（新選）では、「父」の項では、①おとこ親。とのみ記述しているのに対し、「母」では、①親である女・めす。子のある女・めす。女親。母親。とある。これは、バランスを欠く記述であるといえよう。以上の2点をのぞけば、父と母の語釈は同じ視点から説明されており、用語は異っても形式は類似している。このように、同じ視点から説明を与えている語は、両性の語が対応して採録されているもので、かつ、場面による立場の変換のないものである。このグループに属する語は、父・母；父親・母親；実父・実母；家父・家母；継父・継母；継父・継母；義父・義母；養父・養母；老父・老母；亡父・亡母の各組である。対応する語のないもの、先考。先人。先君。先父。先妣について語釈をくらべてみると、次のようになる。

『先考』について

（岩波）　死んだ父。亡父。

（角川）　〔文語的〕死んだ父。亡父。先父。

（明解）　「亡父」の意の漢語的表現。

（新選）　（文章語）〔「考」は亡父〕死んだ父。⟷先妣、　用法→父。

（学研）ではこの語を採録していない。

『先人』

（岩波）　①過去の人。以前の人。←→後人。〔――未発の見〕②祖先。亡父。

（角川）　①昔の人。前代の人。㊀後人。②亡父。③祖先。

（明解）　①〔傑出、未分化などいろいろな面で現代人と比べられ〕昔の人。⟷後人。②「祖先。亡父」の意の漢語的表現。

（新選）　（文章語）①昔の人。前代の人。⟷今人・後人。②先祖・亡父。

（学研）　①むかしの人。前の時代の人。　対 後人。②祖先、または、なくなった父。

『先君』

（岩波）　①先代の君主。②死亡した父。▲②は漢文風の言い方。

（角川）　①先代の君主。先公。②死んだ父。③祖先。

（明解）　①先代の主君。②「先考」の意の古語的表現。

（新選）と（学研）には、この語はない。

『先父』　この語は（角川）のみ採録。

（角川）　死んだ父。亡父。(同)先考。

『先妣』　この語は（新選）のみ採録。

（新選）　（文章語）〔〔妣〕は亡母〕死んだ母。⟷先考。

これらの語釈をみると、２つの立場があることがわかる。それは、文語的とか文章語であるとか古語であるとかをはっきりさせているものと、そうでない語釈とである。辞書により、その語の把握の仕方がちがうことがわかるが、使う立場からは、はっきりと書いてある方が問違いをしないですむ。

（新選）で「父」・「母」の項では、くわしく用法にふれていて、大変よいのだが、「自分の父を他人にいう場合は『老父』『家父』『乃父』という」とのべておきながら、見出し語「老父」の項では、ただ「年をとった父」とのみ記しているのは、片手落ちではないだろうか。「自分の父を他人にいう場合にも使う」という説明がほしい。「母」についても同様である。

次にあげる語は、場面による変換のない場合の語釈と、場の人間関係が投影され、待遇関係をもっている場合の語釈をもっているものである。

まず『慈父』についてあげる。

（岩波）　子に対し深い愛情をもつ父。

（角川）　①情け深い父親
　　②父親をほめていうことば。

（明解）　①思いやりがあってやさしい父。
　　②父親の敬称。

（新選）　①慈愛のふかい父。やさしい父。
　　②父をほめていう語。

（学研）　子どもに対して深い愛情をもっている父。

次に『慈母』の語釈をあげる。

（岩波）　（子に対し）深い愛情をもつ母。子をいつくしむ母。

（角川）　①いつくしみ深い母。
　　②母をほめていうことば。
　　③乳母。養母。
（明解）　深い愛情を持って子供を育てる母。
（新選）　①慈愛のふかい母。やさしい母。
　　②母をほめていう語。
（学研）　子どもに対し、深い愛情を持っている母、なさけ深い母。
『愚父』『愚母』は（岩波）しかとりあげていないが、下記のようである。
『愚父』私の父。▲へりくだった言い方。
『愚母』私の母。▲へりくだった言い方。
また『厳父』については
（岩波）　厳格な父
（角川）　①きびしい父。②他人の父の敬称。
（明解）　〔きびしい父の意〕他人の父に対する敬称。
（新選）　①きびしい父。②他人のちちを尊敬していう語。
（学研）　①しつけのきびしい父。②父親をうやまっている語。
『厳君』については
（岩波）　（他人の）父の敬称。父君。
（角川）　（文語的）父の敬称。
（明解）　（他人の）父に対する敬称。
（新選）　他人の父を尊敬していう語。
（学研）　他人の父をうやまっていう語。

（岩波）では「慈父」「慈母」「厳父」で一貫して、待遇関係を無視して、原義のみ示している。が、待遇関係語をとらないというわけではなく、『厳君』では「他人の父の敬称」とある。他の語も待遇表現に使われることを、はっきりと記してほしいのだが、（新選）（角川）で「父親をほめていう語」とか（明解）で、「父親の敬称」といった表現では、他人の父についていうのか、それとも、自分の父にも他人の父にも使えるのか、この語釈では明確でない。実際の語の働きで、それがはっきりしているならば、語釈の場で明記してくれることが、辞書を使う者の役に立つ。＜表－4＞は、「慈父」・「慈母」、「愚父」・「愚母」、「厳父」・「厳君」について、待遇語としての役割をあげているか、どうか、また、あげているとしたら、他人か、自分かといった対象をはっきりさせているかどうかを表にまとめたものである。

<表－4>

	待遇語として扱っているか					対象をはっきり明記しているか				
語＼辞書名	岩波	角川	明解	新選	学研	岩波	角川	明解	新選	学研
慈　父	×	○	○	○	×		×	×	×	
慈　母	×	○	×	○	×		×		×	
愚　父	○					○				
愚　母	○					○				
厳　父	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×
厳　君	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

（○印は上欄の条件にあっているもの。空欄はそれにあたるものがない場合。）

「賢母」「悲母」はどの辞書も「賢い母」「慈悲深い母」といった説明で、待遇関係を示す語釈はない。唯、悲母につき（角川）が「悲母－慈悲深い母（文章的）」と（ ）つきで文章語であることを示している。

以下は<表－2>と<表－3>にあげた語の語釈で、辞書により相当の相違があるもの、また、語釈を読んでも、用法の点で不安を残すものである。

『母者人』

（岩波）　子が母を親んでいう語。▲母である人の意。

（角川）　母である人。子が母を親んでいう語。

（明解）　〔母である人の意〕昔、自分の母親を子が親んで言った言葉。

『父上』

（角川）　父の敬称

（明解）　父親の敬称←→母上

（新選）　「父」を尊敬してよぶ語。

『おとうさん』

（岩波）　父親に対する普通の言い方。▲もっと丁寧には「おとうさま」等。他人に対して自分の父親を言う時は「ちち」というのが普通。

（角川）　父を敬っていうことば。

（明解）　もと「父」の意の児童語「とと」に基づき、広く「父」の尊敬語。〔文脈により妻が夫をさすこともある〕

（新選）　父を親しんで、あるいは尊敬してよぶ語。

（学研）　男親を親しみうやまっていう語。

「おかあさん」も「おとうさん」と同種の語釈がついている。どちらも現代の日常語であるから、この説明で十分なのかもしれないし、又、日常語であるが故に「父を敬っていうことば」（角川）では不十分である。呼称として使うこともあり、他人の父を敬っていうこともあり、身内の会話の中で妻が夫を、子が父を呼ぶとき、いうときにも用いることが、「父を敬っていうことば」からは、受けとることは難かしい。また、「とと」「てて」「ちゃん」をただ「父」とおきかえているが、「父」の代りにこれらの語を使うことはできないことは明らかで、不親切な語釈といえよう。「ちゃん」は、（岩波）（明解）（新選）では俗語とことわってある。

『おやじ』

（岩波）　①父親のこと。②店の主人や老人をさす言葉。▲主として男がくだけた場面でつかう。

（角川）（おもに男子が用いる）①自分の父。②老人

（明解）　〔成年男子がくつろいだ場面で〕自分の父親を他人に対して言う時の称。〔広義では、父親一般や中年以上の男を指す、また文脈により老人をさすこともある。〕

（新選）　①「父親」のくだけたよび方。

『尊父』

（岩波）　相手の父を敬って言う語。

（角川）　他人の父の敬称。

（明解）　「あなたのお父さま」の意の漢語的表現。

（新選）　他人の父を尊敬していう語。

（学研）　他人の（とくに相手の）父をうやまったいい方。

『父チチ君ギミ』

（角川）　（文語的）父の敬称。

（明解）　（他人の）父の尊称。

（新選）　「父」を尊敬していう語。

『乃ダイ父フ』

（岩波）　①父がわが子に対して自分を指す語。▲なんじの父の意。②一般に父。

（角川）　①父の子に対する自称。②他人の父。③父。

（新選）　父が子に対して自分をいう語。おまえの父。

『母堂』

（岩波）　他人の母に対する敬称。母君。

（角川）　他人の母の敬称。

（明解）　母君。母上。（現在は他人の母についてだけいう）
（新選）　他人の母を尊敬していう語。
（学研）　他人の母をうやまっていう語。母上。おかあさま。
『母君』
（岩波）　母を尊敬していう語。
（角川）　母の敬称。
（明解）　（他人の）母の尊称。
（新選）　母を尊敬していう語。

「おやじ」に対応する「おふくろ」は5種の辞書で、それぞれ工夫した表現をしているが、次の章で扱うので省略する。『母者人』から『母君』まで通して、待遇語としての説明が不十分であること、又、その語を説明するのに単に別の語を置いただけでは、かえって誤解を生じることが問題である。前者については前にふれたので省くが、後者の場合、「母堂」に対して「母君、母上、おかあさま」などをあてた為に、母堂＝母君、母堂＝母上、母堂＝おかあさまとなりうる。おかあさまを使う場面で、いつも母堂を使えるわけではない。こう考えると、安易ないいかえは、むしろ、正しい理解をはばむものとなってしまう。

（三）　高校生の受けとめ方

前章では母側の語の語釈については、簡単にふれたが、ここで実際に、これらの辞書を使っている女子高校生45人にいくつかの語の既知度と語釈について質問をしてみた。たまたま、この高校生の授業で、壺井栄の「母のこと」という随筆を学習していたことから、「母者人」「実母」「継母（ママハハ）」「慈母」「おふくろ」「母堂」の6語をとりあげた。まず、その語を今までに見聞したこともない人、第2に、その語を知ってはいるが、自分で使ったことのない人、第3に、その語を知っておりかつ自分でも使ったことがある人を調べた。＜表－5＞がその結果である。

次に、6語の語釈を示し、一番わかりやすい語釈を選んでもらった。その結果が＜表－6＞である。

＜表－5＞

語＼項目	今までに見聞きしたことはない	その語を知ってはいるが使ったことはない	その語を知っており自分で使ったこともある	
母者人	37(人)(82%)	0	8 (18%)	45 (100)
実母	1 (2%)	28 (62%)	16 (36%)	45 (100)
継母	1 (2%)	16 (36%)	28 (62%)	45 (100)
慈母	20 (44%)	22 (49%)	3 (7%)	45 (100)
おふくろ	0	28 (62%)	17 (38%)	45 (100)
母堂	27 (60%)	15 (33%)	3 (7%)	45 (100)

数字は、人数、（）内は、45人に対する%

＜表－６＞

語	語　　釈	
母者人	（岩波）子が母を親しんでいう語。▲母である人の意。	8(18%)
	（角川）母である人。子が母を親しんでいう語。	3(7%)
	（明解）母である人の意。昔、自分の母親を子が親しんでいったことば。ははじゃ。	29(64%)
	無　回　答	5(11%)
		45
実　母	（岩波）両親として血のつながりをもつ母。	1(2%)
	（角川）生みの母。	23(51%)
	（明解）血をわけた本当の母。	12(27%)
	（新選）血のつながる母。	4(9%)
	（学研）血のつながっている母。	4(9%)
	無　回　答	1(2%)
		45
継母（ままはは）	（岩波）血を分けぬ母・父の後妻。けいぼ。	11(24%)
	（角川）血のつながりのない母。父の後妻。	22(49%)
	（明解）血を分けない母。けいぼ。	3(7%)
	（新選）血のつづかない母。	0
	（学研）血のつながらない母。	9(20%)
		45
慈　母	（岩波）（子に対し）深い愛情をもつ母。子をいつくしむ母。	14(31%)
	（角川）いつくしみ深い母。	4(9%)
	（明解）深い愛情をもって子供を育てる母。	12(27%)
	（新選）慈愛の深い母、やさしい母（母をほめていう）	8(18%)
	（学研）子どもに対し、深い愛情をもっている母。	7(16%)
		45
おふくろ	（岩波）母のこと。▲昔は敬称で「おふくろさま」とも言った。	8(18%)
	（角川）＜俗＞母親。	7(16%)
	（明解）（成年男子が）自分の母親を他人に対して言う時の称。	6(13%)
	（新選）「母親」のくだけたよび方。	4(9%)
	（学研）母を親しんでいう。▲ふつう男子がつかう。	20(44%)
		45
母　堂	（岩波）他人の母に対する敬称。母君。	11(24%)
	（角川）他人の母の敬称。	6(13%)
	（明解）母君、母上（現在は他人の母についてだけ言う）	7(16%)
	（新選）他人のははを尊敬していう語。	6(13%)
	（学研）他人の母をうやまっていう語。母上。おかあさま。	12(27%)
	無　回　答	3(7%)
		45

「母者人」では、この時、はじめて、この語に出合った者、８２％であり、語釈をみると、どれをみても母のことらしいとわかるが、自分たちが今まで見聞きしたことがないから、（明解）の「昔、自分の母親を子が親しんでいった」というのがよいだろうと、この項を選んだもの６４％である。「昔」という１字が強い影響をもっていそうだ。

「実母」という語は９８％が知っている。その語釈となると、生みの母と一緒に生活している東京の核家族の実感を反映して、（角川）の「生みの母」を採る者が他よりやや多い。

「継母」を知っているものは９８％。（岩波）（角川）とも同じような語釈であるが、どちらも同じ程度の支持があるかと思うとそうでもない。（角川）の方に支持が多いのは、「血のつながりのない母」（下線は筆者）という口語表現が選択の要因であるかもしれない。

「慈母」を知っているものは５６％、逆に知らないもの４４％である。５種の語釈のどれにも大差なく支持があるが、（角川）のような簡単な表現より、（岩波）や（明解）のような重層的説明の方が、納得がいくということだろうか。

「おふくろ」は、さすがに全員知っていた。（学研）の「母を親しんでいう」というあっさりした語釈に４４％の支持がある。この語釈に続き、「▲ふつう男子がつかう」とあるが、自分で使ったことがあるという女子高校生がこの調査で３８％いる。これは「おふくろの味」とか歌のことば、ＴＶのＣＭなどの引用で、無雑作に使ったことを含んでいるのではないだろうか。「▲ふつう男子がつかう」という場合の使い方とは異った場面で使っているのではないかと推測される。

「母堂」この語を知らないもの６０％と多い。（学研）の語釈、「他人の母をうやまっていう語。母上。おかあさま」という自分たちの知っている語句を含んだ語釈をとっている。母上や、おかあさまの代りに、新たに知った「母堂」を使うおそれを感じさせる選択だ。

むすび

父と母をあらわす語に的をしぼって５種の辞書を比較してみたが、どの辞書も表現に工夫をこらしていることがわかる。１つの語をとり出し、語釈をくらべると、１種の辞書では表現しきれないものが他の辞書にあり、相補って理解できるものもある。これは、父や母という同一の対象が、人間関係の異った場で、異った表現をもっていたり、又、同一の表現が異った機能をもつことに大きな原因がある。又、時代と共に、同一の言語が示す対象が変っていることにもよる。そのような事情を含みつつも、今日できることはいくつかある。１つは、語釈中の「父の敬称」とか、「父の尊称」といった表現をさけ、どんな立場にある時のその人の敬称なのか、尊称なのか、はっきりさせることである。「他人の父の敬称」とか「自分の父の尊称」とか、第３人称内での他人方なのか自分方なのか、それとも両方なのかを、はっきりさせることである。第２に、安易ないいかえ、

置きかえはできるだけ避けることである。高校生の調査からもうかがえるが、未知と思われる語、使用頻度の少ない語の語釈は、言葉を十分使って説明すること、使用頻度の高いものは、正しい用法を導くような語釈をつけてほしいということである。

（注１）　三省堂「大きな活字表記辞典」
千曲秀版社「字画の見やすい大活字辞典」
岩波書店「岩波現代用字辞典」
柏書房「大活字版必備活用辞典」など。

（注２）　大修館書店「言語３」１９８２　ＶＯＬ１１
「こんな辞書がほしい」より。

（注３）　当研究会で、昨年度数名のものが５種の辞書を用いて行った研究をさす。
「ことば２号」参照。

（注４）　５種の辞書の編集方針を抄録しておく。

（岩波）　この辞書は、現代の話し、聞き、読み、書く上での必要な語を収め、それらの意味・用法を明らかにしようとした。採録語数５万７千余語。

（角川）　この辞典は、中学校・高等学校の各種の教科書、新聞、雑誌、文芸作品、各種の用語集・辞典などの資料に基づいて、学校生活から一般社会生活にわたって、必要な単語、複合語約７万数千語を見出しとして掲げた。

（新明解）この辞典は、現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語に就いて、その多岐にわたる用法を種々の角度から内省、確認し、併せて正確・効果的な使用が可能であることを念じて編集された。採録語数７万２千語以上。

（新選）　国語科だけでなく、高等学校・中学校のすべての学科の学習に必要なことばをとり入れる。現代の社会生活に必要なことばを、最近の新しいものにいたるまで取り入れる。高校生の学習に必要な基本的な古語、中学生に必要な古語ももれなく取り入れる。採録語数７万３８００語。

（学研）　中学校を中心に小学校から高等学校までの教科書中のことばを国語科はもちろん、その他の教科からも厳選した。採録語数４万７千語。

（注５）　「ことば１号」遠藤氏の論文で一部ふれている。

（注６）　５種の辞書はすべて縦組み。

参考文献

日本文法講座　　明治書院
水谷静夫　　待遇表現の基礎
江潮山恒明　　敬語法
文化庁　　「ことば」シリーズ他